

令和6年8月19日

三朝町議会議長 吉 田 道 明 様

総務教育常任委員会委員長 遠藤 勝太郎

派 遣 結 果 報 告 書

派 遣 の 区 分	第3条（1）
派 遣 者 氏 名 （全員を記載）	遠藤勝太郎、森 貴美子、藤井克孝、山口 博、松原成利、小椋泰志
目 的 （調査事項）	三朝町議会総務教育常任委員会所管事務調査 福島県西会津町 ・廃校活用事業（西会津国際芸術村）の取組みについて ・移住支援制度（移住前後のサポート）と子育て支援について 福島県中島村 ・防災アプリを活用した地域防災の在り方について ・子育て支援（児童館や学校給食費無償化）の取組みについて
目 的 地	福島県西会津町 福島県中島村
期 間	令和6年7月16日（火）から18日（木）の3日間
視察又は研修の 成果	福島県西会津町の概要について 西会津町は福島県の北西部に位置し、新潟県と接した県境の町であり、昭和29年に1町9ヶ村が合併し、「西会津町」となり、今年で町政70周年を迎えた。 面積は298.18kmで、総面積の88%が林野であり、町の中央部を阿賀川、JR磐越西線、国道49号が横断しており、平成9年には磐越自動車道が開通し、西会津1Cが設置されているなど、古くから交通の要衝として栄えてきた。 気候は、日本海型に属し、特別豪雪地帯の指定を受けている。 町では、「健やかな人をともに育むまちづくり」「温故知新 地産池笑のまちづくり」「いきいき健康こころつながるまちづくり」「誰もがこちよく暮らせるまちづくり」の4つをちいづくりの方向性のもと、町の将来像である「笑顔つながり夢ふくらむまち～ずーっと、西会津～」の実現に向け各施策を積極的に展開している。

【廃校活用事業の取組みに関する事項】

西会津国際芸術村事業

平成 14 年 4 月、統合中学校を整備した際、空き校舎となった 4 つの中学校については、それぞれ独自のテーマを持った施設として再構築を図るという基本方針のもと、その活用方策について検討を重ねた。このうち旧新郷中学校については、木造校舎の持つ柔らかさ、温かみ、ぬくもりなどの特性を活かし、芸術面での利活用を図るべく具体的な事業展開を模索していた。

そんな折、空き家、空き校舎の活用策について調査を行っていた「NPO 法人・新現役ネット」の会員から「世界中の芸術家を集め、アトリエとして提供したらどうか」との提案がなされた。具体的な事業内容は、旧新郷中学校に海外から芸術家を招き、国際芸術村として活用し、住居を兼ねたアトリエとして整備した校舎を拠点に創作活動に取り組んでもらい、芸術の町をアピールすることによって、地域の活性化を推進しようとするもの。芸術家には、1 年程度滞在しながら創作を続け、学校等での芸術指導などを通し、町民の皆さんとの交流を図ってもらう仕組みだ。

アーティストインレジデンス事業の推進を図るため、平成 16 年 7 月、「NPO 法人西会津国際芸術村」（理事長安藤壽美子）が設立された。外国人アーティストは、杉原千畝領事代理の「命のビザ」の行為により日本に好感を持っており、芸術活動が活発な北欧バルト三国のリトアニア共和国から招致。その後、ポルトガル大使館から自国の芸術家を選んでほしいとの要請を受けた。主に本事業を定着させ芸術村を国内外にアピールできる在日経験も豊富な幅広いネットワークを持つアーティストを招聘した。平成 26 年には、約 40 名の日本人が芸術村の滞在・協力アーティストとして活動した。また、毎年 10 月には公募展を開催し、特に青少年の芸術文化育成に寄与するための活動を中心に行っている。

平成 30 年から指定管理を導入し、一般社団法人 B00T が受託者となり、芸術、文化活動、交流の促進、移住・定住の促進、地域の活性化に関する事業に取り組んでいる。

【所感】

西会津国際芸術村を訪れ、矢部代表理事長に館内を案内していただきながら、お話を伺うことが出来た。平成 30 年に指定管理を導入し、町から 1,500 万円の支援を受けている。建物の維持管理費は町が補うが、10 万円以下の場合は、受託者である B00T が持つようだ。矢部代表自らがデザイナーとしての肩書きを持ち、海外からも仕事の依頼を受けている。矢野代表御自身がアーティストであり、スタッフの中にも、他にも肩書きを持つ方が数人いらっしゃるそうだ。外国人アーティストを招く場合、交通費や滞在費を芸術村が負担していることもあり、経済的に運営していくことの難しさを感じた。

それでも、「未来ある過疎をつくる創造拠点・クリエイティブセンター」として過疎地型起業の種を育てる「土」としての芸術村の役割を考えた時に、芸術村はただ芸術をアピールする場所ではなかった。多様なクリエイターや地域活性化を実践する事業家を集め、地域課題・社会課題に対して新たな視点から取り組みを共有し、アイデアを生み出し、種を育て、プロジェクトを事業化していく。そして、新しい生業のモデルを生み、次世代の暮らし方を創造し、町の活性化に貢献していただくという流れが出来上がっていた。人と創造が集う場づくり、交流人口拡大・移住住宅へのステップとして、まず、①知る ②遊ぶ ③関わる ④暮らす ⑤学ぶ ⑥未来を創る等、①～⑥までの流れが、芸術村の進行中の主な 8 つのプロジェクトと、連動していたのは目新しく感じられた。

三朝町内にも、この様な一連の流れを取り入れてみるのも良いのではないかと
思った。

また、廃校活用事業について特に、西会津国際芸術村について関心を持って
いたが、西会津町役場自体が、平成 24 年小学校統合で空いた校舎を耐震化し、
西会津町役場として活用していることを知ったのには驚いた。廃校利活用が進
んでいると感じた。

【西会津町の移住支援制度と子育て支援に関する事項】

お試し住宅「Otame」は、移住を考えている方が町の暮らしを体験できる。
利用料金は 2 週間 10,000 円、1 ヶ月 15,000 円。三朝町と比べるとかなり安い。
平成 29 年から令和 6 年 6 月までに 44 組 76 名が利用している。お試しこども
園（認定こども園）の利用も相談可能となっている。

「にしあいづ暮らしサポーター」という、町民による移住サポーター制度が
ある。現在 6 名が登録しており、移住者に対して、地域の行事や風習などの情
報提供や体験活動の受け入れを行っているようだ。

また、オーダーメイド移住体験として、町での暮らし体験を希望する方に対
し、先輩移住者との交流や各種体験、施設見学など、オーダーメイド型の暮ら
し体験プログラムを提案している。

実際に町を訪れ、町内のリサーチや体験活動などを行う際、レンタカー代等
を補助する「お試し移住レンタカー等利用補助金」がある。1 日当たり最大
5,000 円を最大 3 日間補助する。申請は 1 人年 1 回限りである。

東京 23 区内に在住又は 23 区内に通勤していた方が移住した場合、単身世帯
で 60 万円、2 人以上の世帯で 100 万円（10 歳未満の子ども 1 人当たり 100 万
円の加算）の、「あいづ移住支援事業補助金」が受けられる。

町独自の子育て支援施策の経済的支援としては、0 歳児から保育料・給食費
の完全無償化や出産祝金、第 1 子出産時 30 万円、第 2 子出産時以降 30 万円＋
20 万円（小中入学時毎 10 万円）が支給される。

町内写真店で記念写真を制作する、「家族の絆応援クーポン」を贈呈している。

乳幼児家庭子育て応援金として、2 歳の年度末まで、こども園を利用せずに
家庭で育児をする保護者に対して 1 児につき毎月 1 万円支給される。※支給要
件あり就学前の子ども、妊婦さんが交流する場として、子育て広場「おいで
おいで」は、毎週月・水・金曜日に開催。水曜日は保育士、保健師が育児相談に
対応してくれる。

子育てコミュニティ施設「キッズランド芝草」は、空いた保育園を活用し、
子どもの遊び場、子育て世代の仲間づくりと地域交流の場となっている。（土・
日曜日、祝日の 9:00～17:00）

放課後児童クラブ「ひだまり子どもクラブ」は、保護者がいない日中、小学
生に対し放課後等に適切な遊び場と生活の場を提供している。（利用料は月
2,000 円。2 人目以降は無料）

【所感】

お話を伺いながら、移住支援や子育て支援のどれもが、きめの細かい内容で
あると感じた。移住支援施策を活用し、町外から転入手続きを行なった者の数
は、平成 27 年から令和 5 年までの 9 年間を振り返ってみると、令和 2 年が 154
人と最も多く、9 年間の平均は、132 人である。しかし、転出数も平成 29 年は
238 人と多い。9 年間の平均は 185 人。町外へ引っ越す予定がある年代は、進

学や就職をひかえる 15～29 歳が多い。町民の意向調査で、「西会津町を将来どのような町にすべきか」の問いに対して、全ての世代が、「若者が働きがいを感じる企業がある町」を一番に上げている。三朝町においても、移住支援・子育て支援制度を整えるとともに、若者たちがいかに地元根付いていただけるかの施策が最も重要だと感じた。

また、空き家バンクの家主さんのほとんどが、中古住宅を購入してほしいと希望しているが、若い世代の移住者は賃貸の希望者が多く、賃貸住宅が不足しているようだ。若者たちが何を必要としているのか、リサーチが大切だと感じた。

福島県中島村の概要について

標高：海拔 290m（役場所在地）

面積：18.92 km

人口：4,773 名（令和 6 年 7 月 1 日現在）

福島県 59 市町村中 2 番目に小さい面積

特産品：トマト、キュウリ、ブロッコリー、花など

村のキャッチフレーズ「みんなが輝らめく 豊かな なかじまむら」

【防災アプリを活用した地域防災の在り方について】

令和元年台風 19 号の際、防災無線だけでは聞き取りづらいとの意見を受け、新たな情報発信手段としてアプリを導入した。防災行政無線の他に幅広く緊急情報を発信できる手段として利用している。防災行政無線は音声のみの為、聞き逃すと必要な情報が得られない事があるが、アプリでは必要な情報を文字にして配信を行うので、豪雨の際に防災行政無線が聞き取りにくい状況でも情報発信ができる。

防災アプリの画面は、4 つの項目があり、状況確認①最新のお知らせ、事前確認②防災・災害情報、困った時は③「照らす」④「ホイッスル」に分けられている。シンプルな仕様なのでわかりやすく、高齢者の方も扱いやすそうだと感じた。

【子育て支援（児童館や学校給食費無償化）の取組みについて】

児童館輝らキッズは、児童館施設と児童クラブ施設を併せ持つ施設。平成 29 年 4 月に開館し 8 年が経過した。職員は 11 名（うち会計年度任用職員 7 名）で運営。

子ども達の総合施設「みんなが主役 笑顔あふれる 児童館」を目指し、児童館運営の 3 つの柱 ①なかじま放課後児童クラブの充実、②子育て支援・体験文化活動の充実、③学習支援の充実を掲げ、子育て支援を行い、小・中学生の居場所づくりを展開している。0～18 歳までの方ならどなたでも来館し無料で利用できる施設。未就学児は親子で利用が可能。

特筆すべきは、やはり学習支援事業だ。金曜日の放課後は、児童クラブの学習支援。小学 4～6 年生・中学 1～3 年生には、長期休業中の学習支援があり、小学生に対して社会福祉協議会がバスを出して送迎してくれる。土曜日には、中学 3 年受験対策学習会による学習支援がある。中学生の学習会は、2 名の塾講師を招聘しているが、利用料は無料。学習ボランティアスタッフとして、近隣高校、県内大学、村民に対して学習支援スタッフの募集を呼びかけ、現在 37 名が登録している。

中島村の移住のポイントに「子育て世代にうれしい支援」をPRしている。村内は待機児童ゼロで、保育園と幼稚園は保育料、さらには給食費も無料。令和4年度からは、中島村内の小中学校の給食費も無料となった。保護者の経済的負担の軽減を図り、村民の子育て支援の貢献を目的としている。小学校から児童館までのバス利用料も無料である。

【所感】

実際に中島村役場に訪れてみて、役場近くに主要な施設がコンパクトにまとまっているのには驚いた。村民にとっても利便性は高いと感じた。

学校給食センターは旧幼稚園の跡地を利用して建てられ、中島村においても、跡地利用が進んでいると思った。

平成27年より、先がけて保育園・幼稚園の保育料と給食費の無料化に取り組んだ事で、中島村は絶滅集落には該当しなかったとの説明を受けた。

令和3年3月議会の一般質問で、小中学校の給食費無料化の提案がなされ、令和4年3月に予算をみて、令和4年4月から小中学校の給食費無料化が実施されたそう。人口は、計4,773人で、議員定数は8人。福島県では2番目に小さな村であるが、財政は健全だと言う。小さな村だが、子育て支援に手厚く、それが村の強みになっている。強みがあるからこそ発信した内容が、子育て世代という受け手に届きやすいのではないだろうかと感じた。

キャッチフレーズにあるように、「みんなが輝らめく 豊かな なかじまむら」の実現に向けて、行政と村全体がコンパクトにまとまっている印象を受けた。

実際に福島県を訪れてみて、鳥取県三朝町と共通点が多いのではないかと感じた。美しい山々、豊かな自然、真面目で実直な人柄、そればかりではなく、行政が抱える課題も共通している内容が多い。少子高齢化、移住定住促進、子育て支援、防災アプリ、廃校利活用、健康づくり等である。

また、三朝町がこれから取り組むジムにおいても、中島村健康づくり交流センター輝らフィットでは、「トレーニングスペース」「スタジオ」「多目的スペース」を備えた施設がある。持久力や筋力を鍛えるために、毎月延べ2,000名が利用し、70代の会員も役150名いるそう。

三朝町が抱える課題に、先行して取り組んでいるのが、まさに西会津町であり中島村だと思った。西会津町と中島村の取組みには、学ぶことが多く、これからも引き続き注目していきたい。

終わりに、訪問した福島県西会津町と福島県中島村の多数の皆様には、全面的な協力を頂き調査が実施できたことに対し、関係者各位に心からの感謝の意を表し結びとしたい。

以上ご報告申し上げます。

総務教育常任委員会副委員長 森 貴美子